

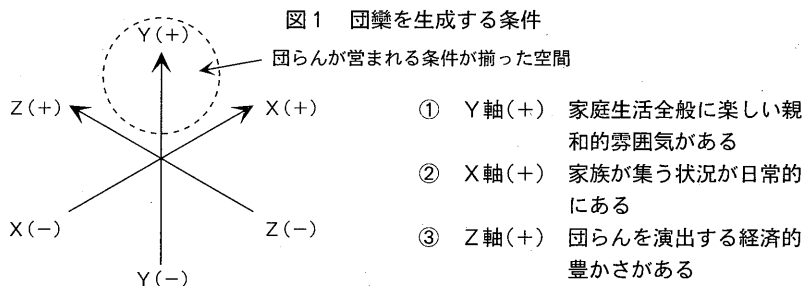
## 一家団樂の社会史的考察 (4)

### － 戦時下の一家団樂 －

佐野 茂

#### I 課題

家庭生活における一家団樂は、ある家族関係・経済的条件等が整えばその営みが織り成されると考えてよい。それは夫婦が仲睦まじく、協力的で、楽しい雰囲気を演出する装置（豪華な食事、テレビ、旅行等）が用意されている場合に、団樂とよばれる楽しい、親和的な家族の集いが営まれる可能性が高くなるということである。(図1)。そのような団樂の生成条件を考えていくと、例えば日本の戦時中の家庭生活全般の場合、社会全体が経済的に困窮し、また家庭生活においても、家族の柱でもある父、また兄が徴兵により家族から離れていく状況は、団樂を営むには最も難しかった時代ではなかったかと推察する。そのような問題意識から、小論では当時の様子を年長者から語ってもらうことにより、その当時の家庭生活がどのように営まれていたかを「団樂」を中心に考証するものである。また同時に、団樂を生み出す条件が何であるかもあらためて考察したい。



## II 方法

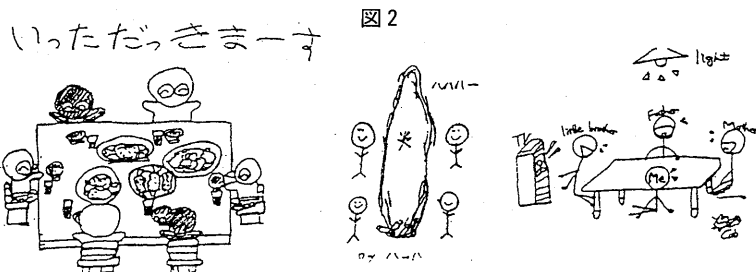
面接法により、日中戦争がはじまった頃(1931、昭和6年)には物心がついていた年長者を対象に(およそ昭和2年以前生まれの方)、当時の団樂を中心とした家庭生活全般を語ってもらった。原則、助成想起、また話したくないことの追求質問はしないということです。ただ、きわめて特殊な時代の私的な事柄であり、従来おこなってきた第三者(筆者)からのインタビューより、近親者が面接したほうが好ましいと判断し、今回の調査においては面接者(調査者)を執筆者の授業履修者(短大1年生・女子)として、その身内を中心に実施することにした。戦争時という家族の生き死にを体験する確立の高い家庭生活全般については、従来の面接経験から、心的感情を聞き出しにくいという一般的状況があったため、近親者が面接者になることにより、話しやすい環境をつくるのが、この面接調査の最も重要な点と考えた。質問内容は表1のとおりである。調査期間は平成8年10月から平成10年9月までで、女性128人、男性60人、計188人である。

表1 主な質問内容

- |                          |                  |
|--------------------------|------------------|
| 1 この年代における団樂の有無          |                  |
| ア 戦中・戦後も団樂はあった           | イ 一時的であれ団樂は無くなった |
| ウ 戦中・戦後とも無かった            |                  |
| 2 どの年代から無くなり、また戻ってきたのか   |                  |
| 年代区分として                  |                  |
| 日中戦争(昭和6年)が始まった頃から       | あった・なくなった        |
| 大東亜・太平洋戦争(昭和16年)が始まった頃から | あった・なくなった        |
| 終戦(昭和19年ぐらいから)が近づいた頃から   | あった・なくなった        |
| 終戦直後                     | あった・なくなった        |
| 終戦1～2年                   | 戻ってきた・まだ戻らなかった   |
| 終戦3～5年                   | 戻ってきた・まだ戻らなかった   |
| 終戦6年以降                   | 戻ってきた・まだ戻らなかった   |
| 3 戦時中、戦後で団樂に関する思い出       |                  |

尚、この調査における「団樂」の概念、イメージとして、文言として「家族が楽しく集い、心が安まる雰囲気、状況で、一般的には夕食時や夕食後、

また旅行時、遊興時に営まれる」という説明ですすめた。また図2のようなイメージ図も合わせて提示した。

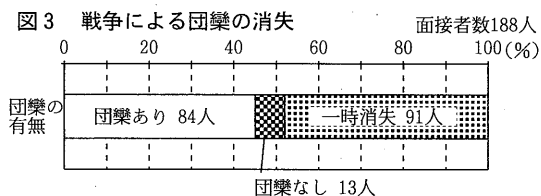


### Ⅲ 調査結果

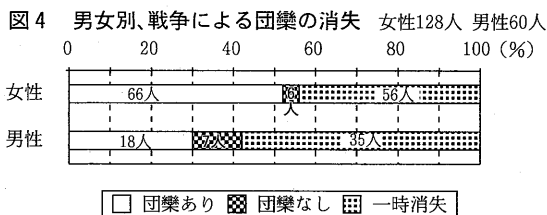
以下、面接調査での結果を示す。団樂の思い出については、その内容が団樂とは無関係と判断したものについては削除した。また表現については原則、標準語に言い換え記述した。

#### 1 団樂の有無についての年次変遷

図3から、半数には至らなかったが、約45%の面接者において、戦争に関係なく団樂があったと回答しており、経済面、家族関係全般において大変厳しい状況にもかかわらず家庭生活において、脈々と営まれていたことがわかる。ただ、半数近くは一時的に戦争の影響から団樂が家庭生活から無くなっており、この時代がきわめて特殊な時代であったことが理解できる。



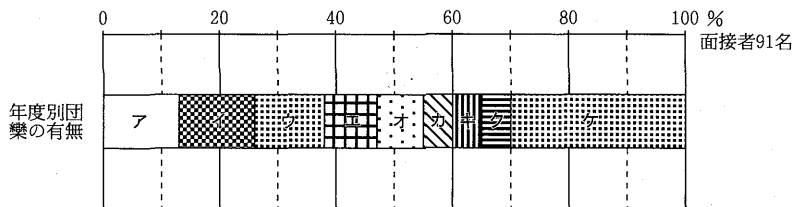
ただ図4より、男性と女性とでは、その捉え方、実感として差異があり、男性においては「出征」という特殊な要因が、団樂に対する体験、思い出を希薄にしたものと考えられる。



また、図5より、一時的に無くなった時代は、「終戦が近づいてきたころから終戦直後ぐらいま

で無くなった」、「太平洋戦争がはじまったくらいから終戦直後ぐらいまで無くなった」、「日中戦争がはじまったくらいから終戦後ぐらいまで無くなった」の順で高かった。戦争中だけではなく、戦後しばらくは団樂が無かったと回答した面接者が多く、食料問題と、家族の帰還が団樂の有無に関係していることが考えられる。

図5 年度別、団樂の消失(1)



- ア 終戦が近づいてきたころから終戦直後ぐらいまで 13% (12人)
- ▣ イ 太平洋戦争がはじまったくらいから終戦直後まで 13% (12人)
- ▤ ウ 日中戦争がはじまったくらいから終戦直後ぐらいまで 12% (11人)
- ▥ エ 太平洋戦争がはじまったくらいから終戦後3～5年ぐらい 9% (8人)
- ▦ オ 終戦が近づいてきたころから終戦直後ぐらいまで無くなった 8% (7人)
- ▧ カ 日中戦争がはじまったくらいから終戦後5年ぐらい 5% (5人)
- ▨ キ 日中戦争がはじまったくらいから終戦が近づいてきたころ 5% (5人)
- ▩ ク 太平洋戦争がはじまったくらいから終戦後2年ぐらい 5% (5人)
- ケ その他の期間 29% (26人)

## 2 戦時中、戦後での団樂(家庭)の思い出

以下、面接で語られたことを要約して列記する。

- 1 食料を探すために両親がいなかった。
- 2 主人が兵隊として出たために、その間ずっと家族とともに帰りをまっていた。残念ながら23年に死亡報告。
- 3 灯火管制のもと灯りをつけられなかったこと。
- 4 空襲がなくなり逃げる必要なくなってきて少しずつ団樂が戻ってきた。

- 5 父、母とも戦争にとられなかったので、家族そろって幸せだった。
- 6 兄の出征の心配と小さな電灯に黒い布をかぶせて、ひっそりと食事をした思い出。
- 7 男手が一人去りまた一人去り私も従軍看護婦として家を去るようになり団樂はなくなっていった。
- 8 召集令状がやはり家庭の雰囲気を暗くしていった。(今から考えれば)
- 9 いつも早く戦争が終わればと話をしていたこと。
- 10 団樂の思い出なんか無い。悲しいことのみ。(敗戦直前父の戦死)
- 11 兄弟や義父が戦地に行くまでは家族が全員そろっているというだけで幸せだった。
- 12 皆無。出征した兄がかえってこなかった心配や、自分が高等小学校卒業後どこに就職するかわからないという不安もあった。
- 13 団樂の雰囲気を感じたのは、出征時皆に祝ってもらった時と、戦後外地から帰ってきた人を迎えた時に酒宴をしたときぐらい。
- 14 明日の食料の心配ばかりで楽しいはなしなどなかった。
- 15 外地にいる時は普段どおりの家庭生活があったが、戦後帰国後は団樂が消えた。
- 16 食料難で家族がオカユ、イモなどを食べ励ましあい一生懸命日本がよくなるよう話しあっていた。
- 17 食料がなかったのでぜんざいをお腹一杯たべて死にたいと考えていた。
- 18 戦時中だったのでかえって家族団樂を大切にしようとした。
- 19 終戦後1年ぐらいたってすさんだ気持ちも落ち着きはじめ、郷里に帰って、食べるものは粗末であったが家族揃っての食事は戦時中と比べ夢のようであった。
- 20 終戦近くは、空襲でいつも防空壕に逃げ込まなくてはならなかった。家族の話どころではなかった。
- 21 暗い部屋のなか、また食物の無かった時代でしたが家族で顔を合わせながら食事をできた時代であった。
- 22 夜は電気がつけれないので縄にしみ込ませた油を燃やした程度の灯りで過ごしていた。あとはラジオを聴く程度。

- 23 防空壕の恐い思い出。
- 24 お米をもつての別府旅行。
- 25 戦地には誰一人家族は赴いていないので、それだけで家族団樂があった。
- 26 空襲時に、どのように皆で逃げるかが、家族の集いの課題であった。
- 27 とにかく貧しかった思い出。
- 28 捕虜になり殺されると思っていたので家族のもとに帰れたときは何ともいえぬ気持ちであった。
- 29 毎日の生活に追われ不安でいっぱいであった。
- 30 祖父が戦後、家にもどってきて本当に嬉しかった。
- 31 汽車に乗って父の実家に泊りに行ったことが家族の嬉しい思い出として残っている。
- 32 外地に赴任中は家族が一緒になかったので団樂は無かった。
- 33 戦時中は中国河北に渡っていたこともあって、親子3人楽しい団樂があった。終戦後も主人が帰還し、2男2女に恵まれ、父母と親子6人、主人の妹1人、計9人の大家族であったが本当に心安まる家族の団樂があった。父母が信心深い、理解ある人で家族に波風が立たず、おかげで4人の子供はとても素直に育った。
- 34 兄弟が多かった分だけ腹がへったが、でも兄弟が多かったことが楽しい家族の集いになったと思う。
- 35 苦しい思い出ばかりであった。
- 36 戦争が長引くにつれて団樂が少なくなってきた。
- 37 兄が出征したからといって家は暗くならなかった。それは喜んで赴いたので。
- 38 腹は減っていたがやはり家族が集う時は、楽しかった。
- 39 戦時中、出征して家族と離れていたので団樂の思い出はない。
- 40 戦時中、また戦後暫らくは、とに角、食料難で人間のエゴが出て、それぞれ勝手にご飯を食べたりで、団樂どころではなかった。
- 41 両親の気持ちとしては(推察だが)、出征した子どもが帰還するかが心配で、団樂どころではなかったと思う。
- 42 兄の出征のこと、また自分の就職も不安で、そんな団樂という楽しい思い出はほとんどなかった。

- 43 敗戦直後に父の戦死があり、悲しいことばかりで団樂の思い出はない。
- 44 食料難で、両親はいつも食料探しにいており、家には両親がいないことが多く団樂どころではなかった。
- 45 灯火管制ということもあって明るい集いという思い出はない。
- 46 終戦後、空襲がなくなり逃げなくてもよいということが実感するにつれて団樂が戻ってきた。
- 47 幸い親が出征しなかったので、家族が揃っていた分幸せで、団樂があった。
- 48 7人兄弟(姉妹)の一番下だったが、食事の時もおかずを皆が分けてくれ、ひもじい思いをしなかった分、自分としては団樂があったと思う。
- 49 出征した兄の陰膳の思い出。
- 50 戦時中、食料難から2人の子どもを栄養失調で亡くした。家族の集い、団樂といえば少しの食料をみんなで分けて食べたつらい思い出ばかりです。
- 51 団樂が消えていったのは戦後であって外地(ソウル)にいるときは終戦直後であっても普段どおりの団樂があった。でも苦しかったが家族の絆はむしろ強まった時代であったとも思う。
- 52 空襲ばかりで、いつも防空壕に逃げ込んでおり家族の会話どころではなかった。
- 53 家族の集いは防空壕に入ったという恐い思い出ばかりである。
- 54 暗い部屋。
- 55 灯火管制のもとの集い。
- 56 苦しい時代であったからこそ、かえって笑いを家族の集いで意識した。
- 57 ひもじかったが、これにより家族間がお互いに励ましあった。
- 58 戦時中、食料の配給に大豆があり、それを炊き込みご飯にすると、当時3才の姉の子どもが「ワァー、お寿司ご飯」といって嬉しそうな声を出したので、それがかえって皆の笑いを取り、苦しい中の数少ない、家族が笑った思い出である。
- 59 当時は挙国一致体制だったので団樂という雰囲気ではなかった。し

かし食事などは全員で集まって食べていた。

60 戦時中8年間戦地で戦い、生き残って故郷に帰り、就職でき家族団欒できたことは何よりも幸福と感じる。

61 とにかく食物、物資が不足していたので家族の絆は強かったように思える。

62 食べ物が少なくなってきて皆で分けたことと、父親がいない思いで。

63 祖父が軍事工場に勤めていたことで、家にずっといてくれて心強かったことが嬉しかった。

64 戦争により、家族が暗くなるのが目に見えた。でもなるべく明るくなるよう心がけた。

65 父が戦地から20年に帰ってきて団欒が戻ってきた。

66 物がなかったけど家族が睦まじく暮らしていたと思う。

67 とにかく家を守ることで必死だった。

68 敗戦後の廃墟から今日の我が国の繁栄をもたらした源は、その一つに家族の団欒と融和にあったと確信しています。

#### IV 考察

##### 1 戦争と家族

半数近くの家庭において団欒が一時的にでも消失していった事実を確認して、あらためて「戦争」という特殊な要因の大きさを痛感する。そして十数年間にわたって、このことが日本の家庭生活に深刻な影を落とした。いくつかの回答例を紹介すると、「召集令状がやはり家庭の雰囲気をも暗くしていった(今から考えれば)」、「(団欒は)皆無。出征した兄が帰ってこなかった心配や、自分が高等小学校卒業後どこに就職するかわからないという不安もあった」、「明日の食料の心配ばかりで楽しい話などなかった」、「防空壕の怖い思い出」、「戦時中、また戦後暫らくは、とに角、食料難で人間のエゴが出て、それぞれ勝手にご飯を食べたりで、団欒どころではなかった」、「両親の気持ちとしては(推察だが)、出征した子どもが帰還するかが心配で、団欒どころではなかったと思う」、「灯火管制もとの集い」、「空襲ばかりで、いつも防空壕に逃げ込んでおり家族の会話どころではなかった」といったもので「食料難」「暗い灯り」「防空壕」「空襲」「出征」「召集令状」が団欒を無くし

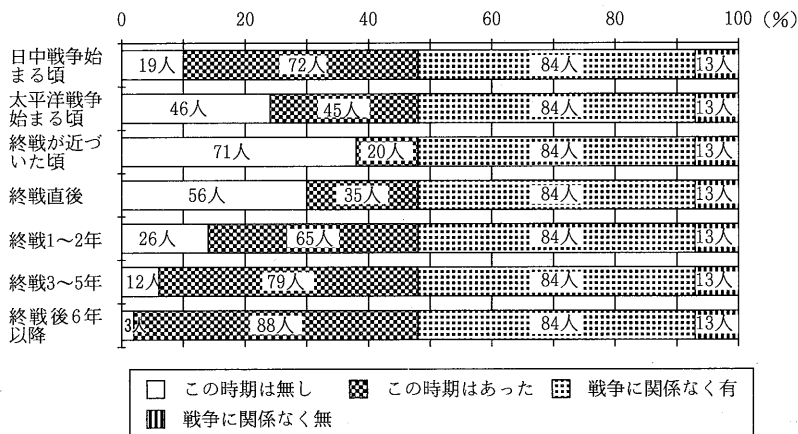


ていった。しかも、この影は終戦により、ただちに消えたわけではなく、戦後もしばらく続き、外地からの帰還者にとっては、食料難も重なり家庭生活全般が最も厳しい時期で、団樂どころではなかったと述懐する面接者が多くみられた。

ただこのような状況も終戦後3～5年も経過すると、一時的に消失した家庭の96%ぐらいの家庭において、団樂が戻ってきている(図6)。

図6 年度別、団樂の消失(2)

面接者188名



## 2 団樂の生成条件再考

上述したように、半数の家庭において団樂が一時的に消失したが、約45%の家庭においては、まことに厳しい社会環境にもかかわらず、団樂が永々と営まれていた(頻度、質ともまことに細々としたもののようにだったが<sup>1)</sup>)と回答された。そこで、これらの回答者の家庭背景を概観し、あらためて団樂が営まれる条件を考察したい。

「団樂がずっとあった家庭」の回答例の主たるものは「父、母とも戦争にとられなかったので、家族そろって幸せだった」、「親戚どうし大勢で暮らし、かえってにぎやかになった」「戦地には誰一人家族は赴いていないので、それだけで家族団樂があった」といったもので、「家族が揃う」ことが第一の条件として考えられる。これに加えて「戦時中だったのでかえって家族団樂を大切にしようとした」、「苦しい時代であったからこそ、かえって笑いを家

族の集いで意識した」、「ひもじかったが、これにより家族間がお互いに励ましあった」「窮乏生活であるがゆえに、家族幸福のために頑張った」という回答例から厳しい家庭環境を逆手にとって、家族の凝集性を高めたという事例も多い。このことから必ずしも社会的、経済的環境が劣悪さが、「団樂」の営みを阻害するわけではなく、団樂を生み出す最も重要な要因が家族へのおもい・愛情等の「心的要因」であるということを再確認できる。

注

- 1) 「団樂はずっとあった」と回答されているが、思いで話等からの内容においてはまことに厳しい家庭生活を語られているということから。